

【資料】

瀕死の欧米中心主義（１）

板垣雄三（東京大学・東京経済大学 名誉教授）

〔まえがき〕

面目一新のアラブ調査室 Arab Studies への投稿として古証文を持ち出すのは、失礼では？とためらいますが、12 年前に「瀕死の欧米中心主義」という標題で私が書いていた文章を一つの資料として提出します。じつは未発表のまま眠る原稿がたくさんあるのですが、時間がたち状況が変わっても、ある段階で自分はこういう関心を持ちこんな考え方をしていたのだということを点検するのは、現在の自分を見つめ直す上でも、意味のあることです。書いた者自身の自己点検というばかりでなく、むかし書かれた文書を時間がへだたる現在から見なおすというのは、「歴史を読む営み」そのものでもあるのです。

現在わたしたちは米国バイデン政権登場の大騒動を実見しているわけですが、ジョー・バイデン氏が 2 期（2009 年 1 月～2017 年 1 月）副大統領を務めたオバマ政権が登場したときも、大騒動だったのです。米大統領選挙・新政権発足の年、2020・21 年と同じように 2008・09 年も、やはり世界は新型インフルエンザ A/H1N1 と並んで中東激動により大揺れで、オバマ当選後 08 年 12 月 27 日にはじまったイスラエル軍の封鎖下ガザ侵攻の「鉛の鋳物」作戦がワシントンでの大統領就任式の 09 年 1 月 20 日の直前の 18 日まで荒れ狂ったのです。2020～21 年は COVID-19 のパンデミックのもとでトランプ退陣ギリギリまで心配されたイスラエルの対イラン戦争挑発は、「アブラハム合意」（アラブ首長国連邦とイスラエルの国交樹立、これをはじめバハレーン、スーダン、モロッコのイスラエル承認）にとりなうアラブ分断・解体）と引き換えでイスラエルがヨルダン西岸併合を一時延期して、不発とはなったものの、米国内の分断が連邦議会議事堂占拠事件という癒しがたい国家分裂の傷を遺すのです。わたしは、トランプ政権下の 2016 年、米国に南北戦争的な分解が迫っていると警告していたのですが、そんな危機への足音が聞こえます。米国がこんなことになったのは、対テロ戦争にのめり込んだ結果で、アラブ・中東問題ことにパレスチナ問題に深い原因があるのです。そして世界は、いま、急速に欧米中心の秩序の終局を迎えようとしています。その意味では、これから読んでいただく 12 年前のわたしの記述は、長期的な見通しとして間違っていないかった、ということに同意していただけないでしょうか。

〔未刊の本の一部として 2009 年初夏に書き箱の底に埋まった、板垣雄三「瀕死の欧米中心主義」〕

「テロとの戦い」の正体^{しょうたい}

日本の自爆経験

戦争には謀略がつきもの。戦争が道義的に弱みをもつものであればあるほど、よけいに粉飾をこらして世人を欺^{あざむ}かなければならない。これを見抜けず、戦争の「提灯^{ちようちん}もち」をして化け^ばの皮がはがれた知識人は、日本にもたくさんいた。

道理に反する戦争は、戦争指導も合理性を欠いてブレーキが効^きかなくなり、破れかぶれの終局をむかえることがある。たとえば、日本が中国を相手の全面戦争にのめり込んだすえの八方破れ。盧溝橋事件（一九三七年）ののち戦争終結など考えもせずドロ沼戦争に踏みこみ、「ジリ貧^{じり}」嵩^こじて「大東亜戦争」と称する「ドカ貧」戦争に突入していった過程を、

〔政治学者で、防衛大学校校長をつとめたこともある〕猪木正道^{いの きまさみち}（一九一四年生まれ）は「自爆戦争」と名づけた（猪木正道『軍国日本の興亡 日清戦争から日中戦争へ』、中公新書、一九九五年）。

私は猪木のこの表現を借りて、二一世紀の開幕とともに「終わりを予定しない戦争」として開始された「反テロ戦争」を、「自爆戦争」と説明してきた。「テロリスト」の〈カミカゼ〉自爆を仕立てて非難してみせれば、「反テロ戦争」自体の「自爆戦争」性は隠しおおせるはずとあてこんだ、その推進者たちの目算は、事実あっけなく崩れ去っていく。

イメージ操作法

「反テロ戦争」は、二〇〇一年ニューヨークとワシントンDCで起きた九・一一事件を機に開始された、といわれる。だが実際には、その起源は一九七〇年代にさかのぼる。

「反テロ戦争」言説を発明し操作した元締^{もとじめ}は、イスラエル政府だった。六日戦争（一九六七年）で大膨張したイスラエル。武力による領土拡張・征服地居座りに対して、国際的批判がたかまる（七四年パレスチナ解放機構PLOは国連オブザーバー資格を得、七五年国連総会は「シオニズムは人種主義」決議を採択）。この国際世論を切り崩すためイスラエルがとった対抗策、それが「テロとの戦い」という論法だった。

その直前まで、イスラエル国家には誕生前後のテロ活動の前科がつきまっていた（四年英国中東担当相モイン卿暗殺／四六年エルサレムのキング＝デヴィッド・ホテル爆破／

四八年パレスチナのデイル-ヤスィーン村その他での住民虐殺や国連調停官ベルナドット伯〔スウェーデン王族〕暗殺／五四年対エジプト・テロ破壊活動が発覚、その政治責任問題が六〇年代末までくすぶる〔ラヴォン事件〕／など)。だが、ここで話は一変。七二年、「アラブ赤軍」を名のる日本人青年三名がテルアヴィヴ国際空港ロビーを襲撃し、ついでパレスチナ人奇襲部隊によるミュンヘン・オリンピック村占拠事件が起きる。これを境に、離散パレスチナ人のパレスチナ解放運動とそれに同情し連帯する運動には、「国際テロ」・「国際テロ支援」のレッテルが貼られる。「ユダヤ人の国」・「中東唯一の民主主義国」を吹聴するイスラエルは、その抹殺をねらうテロリストの挑戦を受け、邪悪な反ユダヤ主義再来の脅威にさらされている、というわけ。

こうしてイスラエルは、遠慮会釈なく、世界中どこにでも腕を伸ばして「反テロ戦争」を実行できるという立場をうちだした。〔デイル-ヤスィーン村民虐殺とベルナドット伯暗殺というテロ事件のそれぞれ責任者として凶状もちだった〕メナヘム・ベギン（一九一三～九二）とイツハク・シャミール（一九一五年生まれ）とがあいついで首相の座につき、「反テロ戦争」を指図する。

反テロ戦争の原型

エンテベ空港事件（七六年、テルアヴィヴ発エール・フランス機がパレスチナ人に乗っ取られると、イスラエル空軍の編隊がウガンダの首都空港を急襲）／イスラエル諜報機関が世界各地で実行した対PLO（パレスチナ解放機構）破壊工作（幹部暗殺、郵便爆弾など）／が連続。〔ユダヤ人入植者がパレスチナ人市長らの殺傷をねらったテロ活動をまじえて〕占領地では強引な入植・併合政策を展開／イラクの原子炉はサウジ領空ごえ空爆で破壊（八一年）／など、イスラエルがとった行動は、予防先制攻撃による「反テロ戦争」の思想を顕示するものだった。

こうして八二年、PLO殲滅を策すシャロン国防相のもと、イスラエル軍は隣国レバノンに全面侵攻、本格的な「反テロ戦争」の原型をひらく。ベイルートのパレスチナ人地区（サブラー、シャーティーラー）で起きる虐殺事件は、アフガン・イラク・パレスチナ（ガ

ザ・西岸）などで一般市民を無差別に攻撃する「反テロ戦争」の二世紀局面の先駆けとなった。

新しい主役

米国のレーガン共和党政権はイスラエルのこの〔第一次〕レバノン戦争を強力に支援。それ以降、米国はイスラエルの「反テロ戦争」言説に同調するだけでなく、その推進役を引き受けはじめる。米国のリビア爆撃後まもなく開かれた主要先進国（G7＋EU）東京サミットは、「国際テロリズム」を主要議題にすえた（八六年）。日本社会は「反テロ戦争」へと舵をきる動きに加勢する脇役だったが、そのかわり方は、〔浅間山荘に終わる連合赤軍の自滅の報に接してテルアヴィヴ空港襲撃を敢行した〕日本人青年たちから〔九・一一後、アフガン・イラクでの「反テロ戦争」への支持・参加に踏みきる〕小泉政権まで、主観的にはいつも「受身」だった。

湾岸戦争ののち登場する民主党クリントン政権は、「テロ・テロ支援・大量破壊兵器拡散との闘い」を国家安全保障の最優先課題と決め、米国議会も「テロ発生をもって戦争状態とみなす」立場を採用する。ケニアとタンザニアで起きた米国大使館爆破事件への報復としてアフガニスタンとスーダンに巡航ミサイルを撃ちこんだ（九八年）のも、さらにまた、コソヴォ紛争においてNATO軍の国連決議抜きユーゴ爆撃を「人道的介入」と正当化した（九九年）のも、クリントン政権。だから〇一年、共和党ブッシュ〔息子〕政権がグローバル「反テロ戦争」時代の幕を押しあけるのは、けっして「九・一一」の衝撃がヤミクモにもたらした突発的反応だったのではない。

米イ関係の秘密

このような経過は、イスラエル国家が米国社会の奥ふかく埋めこまれ、米国の国内政治過程と一体化してしまった結果である。

米・ソ合作で生まれたイスラエル国家ではあったが、イスラエルが英・仏と秘密の軍事同盟を結んでエジプトのスエズ運河国有化をつぶそうとしたスエズ戦争（一九五六年）では、共和党アイゼンハワー政権はイスラエルにきびしく撤退を迫ったし、イスラエルの核武装策動に対して、民主党J・F・ケネディ政権はこれをつよく阻止しようとして、そのためケネディ暗殺（六三年）の黒幕にイスラエルがあるのでは？との疑惑も取りざたされ

たほどだった。しかし、ケネディを継いだリンドン・ジョンソン政権時代から、米・イスラエル関係はうえに見たような癒着の新段階にはいる。六日戦争（六七年）以降、もともと人を幻惑する作為的シカケだった「冷戦」システムにかこつけ、これに便乗しながら、強硬右派が半耳^{ぎゅうじ}りはじめるイスラエルは、米国社会に根ぶかく連結し寄生するようになっていった。

こうして、米国政治にはたらきかけるイスラエル・ロビーの実績／米国の対外援助のなかで質量ともに抜群・別格の比重を占める対イスラエル援助／政権中枢に参画する親イスラエルのネオコン高官（急進派の体質をもつ新保守主義者）／などが目立つようになった。

だが、現象の表層にだけ目を奪われていてはならない。因縁^{いんねん}の深みをさぐるには、米国とイスラエルとが、どちらも〔先住民の残した地名までは抹殺しきれない〕植民者国家だという親近性を、掘りさげて考えてみる必要がある。さらに、東欧・ロシアからのユダヤ人移民が定着し社会^{エスタブリッシュメント}をうごかす階層を生みだす場が、米国とイスラエルだったことの意味についても、また。米国社会の深部で「市民宗教」＝愛国心がはぐくむ「選民」意識／TV宗教番組の熱狂的な説教者たちが煽^{あお}る黙示録的終末観の緊張／が、イスラエル国家を支え押しあげるキリスト教シオニズムの異様な蟻塚を築いてもきた。

世界を変えて責任回避

迷走する宿主^{ホスト}

湾岸戦争がイラクという「国」を半殺し状態にし、ソ連まで解体して「冷戦」システムのなれあい構造が破れて以来、「一国覇権」を樹立したはずだった米国という〔上記のような〕宿主^{しゅくしゅ}は「のたうち回り」をはじめ。／新自由主義・市場原理主義・金融工学（ハイリスク＝ハイリターン幻想の操縦、信用格付け操作）の構造欠陥が肥大化／九・一一便乗の「演出」／イラク・イラン・北朝鮮を「悪の枢軸」と名ざす／グローバルな情報＝金融管理や監視社会化や国際法無視（予防先制攻撃、グアンタナモ基地を頂点に世界に張りめぐらした「テロリスト」拉致拘留施設網など）に支えられた「反テロ戦争」体制／アフガニスタン・イラクでのドロ沼戦争にあえて突入する／一般市民を攻撃対象として凌辱^{りょうじよく}と分断の心理操作にたよるハイテク民営化戦争マシーン／「九・一一型」惨事の再発への待望を隠さない／イラン・シリアへの戦火の転移＝拡大ゲームをもてあそび、中東政治地図の大変動

と〔朝鮮半島もまきこむ〕その世界的波及という冒険に賭ける／といった迷走。

正気の沙汰でないこんな「自爆戦争」で、米国の威信は地に墮ちた。政権は、内部で正
反対の政策判断が激突し引っぱりあって、「8の字」蛇行。イスラエル存立をヘッジするリ
スク管理戦争は醜い征服戦争の姿をさらす。そんな「反テロ戦争」に足をとられる米国は、
世界を変えるショック療法に訴えてみずからの脱出口をさぐるという悪循環にはまる。

欧州のひけ目

ヨーロッパは「反テロ戦争」をキッパリとは批判できなかった。わが身をただすよりは、
責任のがれ。まずは世界の舞台装置を思いきり変えてしまえという米国の乱暴な「打開策」
に引きずられてのことだ。さすがにイラク戦争となると足並みは乱れるが、先行したアフ
ガン戦争には、ヨーロッパは、米国に寄りそう立場から（タテマエは結束して「九・一一」
に立ちむかう、ホンネは米国の独走にブレーキをかける）、NATOレベルで協力した。

ヨーロッパのキリスト教こそ反ユダヤ主義の歴史的根源だ、ということに加え、国際的
持合の怪物的植民国家イスラエルをしつらえるために世界最大規模のパレスチナ難民問題
（世界の難民の四分の一はパレスチナ人、しかも彼らは国連のさだめた「難民の地位に関
する条約」の対象外）をつくりだすコトの発端をひらいた道義的責任から、ヨーロッパ社
会は逃げるできない。ヨーロッパが「反テロ戦争」に反対できないのは、「わが身か
わいさ」からだ。

私は九・一一後の事態を「二〇世紀問題環」のコピーだと言ってきた〔図4〕。「二〇世紀
問題環」とは、二〇世紀世界の方向を決めた問題連関の魔法の指輪。すなわち、〔反ユダヤ
主義の帰結の〕ホロコーストが起きる⇒イスラエルの国づくりが冷戦体制をになう米・ソ
主導で成就⇒それは「ポストコロニアル」時代の植民地主義を体現⇒これを維持し支える
「国際的（じつは欧米主導の）」連携構造（これこそホロコーストまで結果した反ユダヤ主
義に責任を負うべき元凶）⇒……、という円環。このコピーが、九・一一⇒世界中に「反
テロ戦争」をひろげる体制⇒革命家・革命運動が消滅した世界で体制変革をめざすネオコ
ンや新自由主義（「革命」の横領・奪取）⇒これらをグローバルに推進する米国の軍事的優

越（九・一一の衝撃の利用は、その繰り返しへの誘惑を断ちきれなくする）⇒……、という模造品イミテーションの新型円環リングになった。

偽善の脱出口

欧米社会がパレスチナ人を贖罪スケープ・ゴートの山羊に仕立ててみずからの反ユダヤ主義を免責しようとする偽善。そこからパレスチナ問題の不正義・不公正が絶望的なまで累積るいせきしてしまった。これへの批判や抵抗を「テロ」だ／「反ユダヤ主義」だ／「原理主義過激派」だ／と決めつけ、世界のイスラーム教徒に照準をさだめてモグラ叩きを予定する「反テロ戦争」。だが、道義的弱さと存立不安とをかかえたイスラエル国家の生き残り策をあやつるこの戦争は、「テロ非難」・「テロリスト呼ばわり」で罪科なすを擦りつけあう亀裂・反目・抗争を世界的に拡大し、絵空事えそらごとでない「核テロ」による人類「共滅」の地獄図をさえ招きかねない。それだからと逆にこの危険を楯にとり、パレスチナ問題の負い目を突っ返す「開きなおり」を合理化し、それでどこまでがんばれるか試してみよう、というのが欧米の策略マヌーヴァー。欧米だけで背負いきれぬ難問は人類全体の責任で処理するのがカシコイやり方、こんな言い分・申し条で、欧米の実力（軍事力）と指導権とを維持・確保しようとする。この算段こそ、じつは「反テロ戦争」の勝負どころではないのか。

自己破産の喩えたと

無謀なイラク戦争が予想どおり袋小路に迷い込むのを見て、私は「自己破産」からの類推アナロジーをもちだすようになった。クレジットカードが私たちの暮らしのなかに普及したので、多重債務や自己破産ということばは身近にゴロゴロある。「自己破産」とは、債務を背負った人が債務免除のため自分に返済能力がないことを宣言して裁判所の破産宣告を求める法的手続きだ。そこまでいくにはいろいろの事情・背景があるから一概にはいえないが、ヤミクモに借りるだけ借りてしまってから弁済はとてもムリと申し立てる場合もおおい。

根底にパレスチナ問題がからみ、いくら否定しても取り繕^{つくろ}ってもイスラーム敵視が作動^{まど}してしまう「反テロ戦争」。最初から失敗がわかっているのに、それに突入、世界をイスラエルごと大激動にたたきこみ、ニッチもサッチもいかぬ情景を演出したあげく、その収拾に世界を巻きこんで責任を分散させる。これは「自己破産」の一手法だ。私はこれを欧米中心主義の「自己破産」の一環と捉えている。型にはまった思想・態度・行動が歴史のなかで溜めこんだ倫理的責任のツケを一気に清算しようとする動き。取り返しのつかぬ過去は過去として区切りをつけ、帳消し・免責されたことにしてしまいたい心的傾向が、やたらと顔をだす。印籠^{あおい}の葵の御紋は、ナクバ抜きホロコーストとイスラーム原理主義の物語。

ところが、二一世紀の幕あけに米国のブッシュ（息子）政権が振りかざしてみせた「魔法の指輪」は、いかがわしい模造品^{まがいのもの}だったただけ、いかんせん効能はたよりなかった。

硝煙弾雨^{しょうえんだんう}とオバマ政権

新大統領登場

「反テロ戦争」[の自己回転] にとって、なにより必要なのは、齟齬^{そご}と失敗^{しくじり}。イラク／アフガニスタン／パキスタン／ソマリア／いたるところで、混迷のゆきづまり状態。さらに人々の懸念^{けねん}は的中し、米国発の金融危機が引きがねとなって世界中が深刻な不況におちいり、新自由主義の無残な破綻^{はたん}はだれの目にも明らかとなった。こうして、二〇〇八年秋の米国大統領選挙は、「変革^{チェンジ}」と「イラク撤退」とを目標にかかげたバラク・フセイン・オバマ・ジュニア（一九六一年生まれ）の勝利に帰する（就任式は〇九年一月二〇日）。

オバマの背景

米国史上、第四四代目にしてはじめて、非白人でアフリカ系の大統領〔フセイン〔息子^{息子}〕バラク〕というアラビア語名を二つもつケニア人留学生の父から同名を受け継ぐ息子^{息子}とし

て生まれ、本人はキリスト教徒だがイスラームの背景をさえもつ〕が出現した。四七歳の彼をあと押しする選挙民のあいだで広がった「フセニアック」現象（ID名を登録するさい中間名に「フセイン」を使うのが流行）は、イラクのサッダーム・フセイン政権を打倒して五年後の米国社会で、イラク戦争がどれほど重荷と感じられていたかを証明するものだ。

米国のファーストレディとなったミシェル夫人は、^{おっと}夫とおなじく法律家だが、かつて南部の^{プランテーション}綿作農場で使役されていた黒人奴隷の子孫である。リンカーン大統領の奴隷解放宣言（一八六三年）から百四十五年後の快挙だ。〔他方、黒人の父と白人の母とのあいだに生まれ、十歳からは母方の^{ははかた}祖父母にハワイで養育された〕大統領バラク・オバマのほうは、どうか（バラク・オバマ〔白倉三紀子・木内裕也訳〕、『マイ・ドリーム バラク・オバマ自伝』、ダイヤモンド社、二〇〇七年、〔原著 Dreams from my Father: A Story of Race and Inheritance 一九九五年／二〇〇四年〕）。〔幼時に母と別居・離婚して帰国しケニア政府の経済専門家となった〕父バラク（一九三六～八二）との直接の^{えにし}縁は^{あわ}淡いものだったが、父の^{けいるい}係累にあたるムスリムの大親族集団（ヴィクトリア湖に面したニヤンザ地方を中心にケニア内外に散らばる）は、みずからのルーツに関心の深い大統領バラクとしっかり結ばれている。母アン・ドナム（一九四二～九五）が再婚した相手＝インドネシア人ムスリムの^{まふ}継父ロロ・スートロ（一九三六～八七。米国留学から帰国し地質調査専門家となる）のもとで、オバマはジャカルタの小学校にかよい、妹マヤ・スートロも生まれた（マヤはハワイで教育者となり、出自が中国系マレーシア人のコンラッド・エンと結婚）。母アンは〔オバマの思春期をつうじてロロとは別居、やがて離婚したが〕終生、ジャワの文化伝統を内在的に観察しようとする人類学者として、インドネシアの農村調査にかかわったから、オバマはアジアへの関心をもちつづけたはずだ（大学進学まで彼が学んだホノルルの私立プナホウ^{スクール}一貫校には、アジア系の生徒も多数いた）。オバマを手塩にかけた祖父母の先祖は英国人とされるが、祖母マデリン・ダナムの母にはアメリカ先住民^{インディアン}チェロキー族の血が混じっているともしられる。妹のマヤは自称、仏教徒。妻ミシエルの父方の^{うちかた}大叔父のひとりはユダヤ教の有力なラビだった。

アフリカ起源説

オバマにとっての「n地域」的背景は、かくもまばゆい多様性に^{いろど}彩られている。母アンは、子どもたちに、それぞれの父親との結びつきを自覚させるよう教育したという。そんなオバマが大統領になった。それは、^{ジ・アメリカカズ}アメリカ大陸が中東とともに〔前者は獲得的に、後者は生得的に〕グローバリズムを体現する地域だという私の見方からすると、米国が植民国家を脱却し^{しん}真の「アメリカ」化に向かおうとする転換を象徴するものだ。

人類史は、それ自体グローバリゼーションの過程である。近年、ヒトのアフリカ単一起源説（^{ホモ・サピエンス}現生人類の母系をさかのぼる共通の祖先が二十万年ないし三十万年まえの東アフリカ^{サヴァンナ}熱帯草原に存在したと推定し、やがて地球上ひろい範囲に拡散がはじまったと考える「出アフリカ」仮説）、すなわちミトコンドリアDNAイヴ（エヴァ）やこれと^{つい}対をなすY染色体アダムの理論、がしだいに有力視されるようになってきた。東アフリカと「アメリカ」とをつなぐオバマの登場は、期せずして^{グローバルヒストリー}環 球 史 の観点からも意義ふかい。

オバマの泣き所

ところが、オバマ政権誕生のまえから、その姿勢・その^{さきゆ}先行きには疑問符がついていた。

「^{チェンジ}変革」の絶唱と「反テロ戦争」は続行という立場とが、どう折りあうのか。オバマは、大統領予備選立候補の段階から、イラク戦争には一貫して反対したことを誇りながら、アフガンでの「反テロ戦争」は逆に態勢を強化して戦いぬくと公約していたからだ。米国がアフガン・パキスタンでイラクの二の舞の泥沼に苦しみ、ソ連をつぶしたアフガン問題が今度は米国の^{ちやうらく}凋落を促進することになるのは、目に見えていたというのに。米大統領選の途中で、英国政府は「反テロ戦争」概念を見なおす立場を明確にし、NATO諸国もアフガンでの軍事負担にはすでに逃げ腰になっていた。

オバマ政権にとってなかなかの難儀は、「反テロ戦争」の絶望的^{スベイン}らせん階段を脱けだして

「反テロ戦争」時代に終止符を打つことである。それは、イスラエル国家を抱えこんだ米
国社会の性^{さが}のためだ。就任当日、ホワイトハウスのホームページは、「中東において引き受
けるべき第一のそして議論^{インコントロヴァーティブル}の余地のない責任事項は、イスラエルの安全」と公約していた。

手続き・シカケ

すでに予備選段階で、オバマは、名だたるイスラエル・ロビー＝AIPAC（米・イス
ラエル公共問題委員会）の集会に出席し、「イスラエルの安全は神聖不可侵^{サクロサンクト}で
取引対象でなく、エルサレムは永久にイスラエルの首都であって東西に分割されるべきで
ない、自分は友人としてイスラエルを絶対に裏切らない」と誓っていた。彼は副大統領候
補に〔「私はシオニストだ」と公言してはばからない強烈なイスラエル支持者〕ジョー・バ
イデンを選び、当選後は蹴落^{けお}とした競争相手＝これまた親イスラエルで知られるヒラリ
ー・クリントンを国務長官に任命、前政権で「反テロ戦争」遂行^{すいこう}の責任者だった国防長官
ロバート・ゲイツの留任を決め、大統領主席補佐官には〔イスラエル市民権をもちイスラ
エルで軍務経験もある〕ラーム・エマニュエルを据える、という念^いの入れようだった。

これは、九・一一からイラク戦争までのブッシュ（息子）前政権中枢の戦争犯罪および
人道に対する罪を問うことはしないという約束の表明にあたる。学生時代アパルトヘイト
に反対する南ア・ボイコットの草の根運動家だったこともあるオバマ（のちには「パレス
チナ人ほど酷い目^{ひど}にあった受難者はいない」と洩^もらしていた、とも伝えられる）が、大統
領の座に到達するには、これだけの周到な手続きとシカケとが必要だったのだ。

ガザ攻囲まで

オバマ政権がいよいよ成立にむかう過程、それはイスラエル軍のガザ全面攻撃（〇八年
一二月二七日～〇九年一月一八日の「鉛^{なまり}の鋳物^{いもの}」作戦）が荒れ狂う日々だった。

どうして、そうなったのか。それまでイスラエルがたどった経路を見ておこう。「和平交渉」につきあうフリして、領域と統治の再編成を思うがまますすめた強引さ。//南部レバノン支配の放棄（二〇〇〇年）／パレスチナ自治の破壊・再占領（〇二年以降）とヤーセル・アラファート〔大統領〕（一九二九～二〇〇四）の〔政治的・生理的〕抹殺／ガザ入植地撤去・部隊撤退（〇五年）／〔〇四年国際司法裁判所が「壁」建設を国際法違反と認めた勧告的意見にもかかわらず〕ヨルダン西岸に張りめぐらす隔離壁・新入植地の建設を強行して、支配を強化／など。

ところが、〇六年、暗雲立ちこめる未来の予感があらためてイスラエル社会を襲う。//「反テロ戦争」の大立者で〔〇一年から〕首相、局面打開の新党を立ちあげたばかりのアリエル・シャロン（一九二八年生まれ）が脳卒中で倒れる／「和平交渉」の不当性・非対称性を批判してやめぬハマス（イスラーム抵抗運動）がパレスチナ立法議会選挙で大勝、ズバリ「一九四八年問題」（イスラエルの存在根拠そのものを問う）が表面化／レバノンとの一ヵ月余の軍事衝突（第二次レバノン戦争・^{タンムーズ}七月戦争）では〔レバノンのシーア派〕ヒズボラー（神の党）の抵抗を打破できず（むしろその政治的地位を強化）、社会インフラを爆撃破壊しつくした廃墟へのクラスター爆弾駆け込みバラマキ（住民殺傷の長期持続をねらう）でもって停戦に応じる／。

暗い未来の予感

イスラエル^{ひと}独り勝ちの局面も、たしかになくはない。アフガン戦争・イラク戦争の「反テロ戦争」効果で、イスラエルは漁夫の利を得た。カスピ海の原油・天然ガスを地中海に運びだすBTCパイプライン（アゼルバイジャンの^バクー—グルジアの^トビリシートルコの^{ジェ}イハンをつなぐ）の完成が、それ（トルコでの開業式典は、奇しくも対レバノン空爆開始の日）。これをイスラエルのアシュドッドに接続する東地中海（シリア・レバノン沖）海底パイプラインの工事が完了すれば、〔並行パイプラインで、トルコ東部チグリス・ユーフラテス両河水源から水運び込むことができる〕イスラエルは、カスピ海原油・ガスを紅海に面したエイラト港から積みだして一挙にアジアの巨大エネルギー市場に発言権を打ちたて、〔ペルシア〕湾岸産油国を牽制できるばかりか、イラク・シリアという文明発

祥の地の水を涸らして住民を根絶やしにすることだってできるようになる。この計画は、

スーダン・イエメン・「アフリカの角」など紅海地域の紛争操作とつながり、他方〔片や湾岸を、片やカスピ海・トルコ東部寄りのイラン西北部からコーカサス・中央アジアまでを、にらむ〕対イラン戦略とも密着しているのだ。

だが、イスラエルの不安は膨れるばかり。《米国の覇権はいつまで保つか／人口学的にもイスラーム世界に呑みこまれそうなイスラエルの危うい未来／ムスリム世界を分裂させつつパレスチナ人の意志を挫きつづけるのは、いつまで可能？／イランの核施設を叩く対イラン攻撃をいかに果たすか。それを望まぬ米国・欧州内の動きにはどうウラをかくか／グローバル「反テロ戦争」に動員できた中国・インド・ロシアなどを利用しつつ、一部それらに乗り換えたりして米国依存のリスクを減らす手段はあるか／等々。

ここから、パレスチナ人指導部の内部対立につけこんで、三年間にわたり険悪化するばかりの対ガザ封鎖・攻撃が、西岸の支配強化と並行して、実施された。米・欧はハマースを交渉相手とせず、ハマースが統治するガザを締めあげて窒息させようとする。

ガザとオバマ

オバマ政権誕生までの日数勘定をしながら、イスラエルは、ハマース統治下のガザ住民に対する集団懲罰の全面攻撃を開始。イスラエル自身が停戦協定を破ったのは頬かぶり、ガザの抵抗勢力の手製ロケットがイスラエル市民を傷つけていると言って、何万倍もの報復をおこなう。ロケットを打ちこむ目のまえのイスラエル領こそわが故郷、そんな割り切れぬ気持ちのパレスチナ人百五十万を、巨大監獄なみに閉じこめる狭い檻状ゲッターのガザ地帯。長期の苛酷な占領につづき、想像を絶する非人道的封鎖（食糧・水・燃料・電力・医薬品などの供給も果実輸出も海外送金受取りも遮断、労働の場も機会も奪う）のもと、市民生活への襲撃（住宅地ミサイル攻撃など）・心理的威嚇（超音速ジェット機をつくる爆発音など）の止むことのない明け暮れに、息の根をとめられそうな住民。これに対して、

イスラエルは〔攻撃停止を求める国連決議は拒否したのち〕米国大統領就任式にあわせて一方的に停戦するまで二十二日間、殺戮・破壊をほしいままにした。〔深刻な火傷^{やけど}をもたらす〕白リン弾や〔人体をコナゴナにする残虐兵器〕DIME^{ダ イ ム}も使用された。エジプトから物資をホソボソ搬入していた地下トンネルも、あらかた破壊された。これは「戦争」でなく、民族抹殺をねらう集団虐殺^{ジェノサイド}だ。

だが、その実行者にとっては、これはイスラエル政治のご都合に沿う選挙運動^{キャンペーン}でしかなかったのだ。〔シャロンの後継者、第二次レバノン戦争でミソをつけた〕オルメルト首相は汚職容疑で追いつめられ、〔交代予定者〕リヴニ外相は組閣に失敗、議会選挙^{クネセツト}（〇九年二月）による局面打開^{ひら}に賭けていたから。そこで、〔イスラエル国民の圧倒的多数がガザ猛攻を支持したの に | だから〕思惑^{おもわく}ハズレが起きる。ガザ停戦二十三日後（オバマ就任二十一日後）におこなわれた選挙の結末とは、パレスチナ国家を認めず／パレスチナ人に対してさらに拒否的な／ベンヤミン・ネタニヤフ首班の連立政権が成立。〔躍進したロシア系右派政党の党首で外相となる〕アヴィグドル・リーベルマンはイスラエル市民権をもつアラブ〔パレスチナ人〕の国外排除・追放を主張する。

イスラエルが国連人権委員会特別調査官（プリンストン大リチャード・フォーク名誉教授）の入国を拒否したのは、ガザ攻撃開始の合図でもあった。ガザ猛攻中、国連機関の施設（学校・食糧倉庫など）も攻撃目標にされた。イスラエル国家の戦争犯罪に対する非難が世界中に拡がる。「中東和平」・「テロとの戦い」などの言説のいかがわしさを人々ははつきり認識しただけでなく、南アの人種隔離体制^{アパルトヘイト}の解体に効果があった国際的ボイコットをこんどはイスラエルに対して組織するべきだという声がたかまりはじめた。

しかし次期大統領オバマは、ハマースの武装闘争を非難／イスラエルの自衛権を擁護／して、懸念^{けねん}を示しただけ。大統領就任とともにオバマは、中東特使ジョージ・ミッチェル（一九三三年生まれのアラブ〔レバノン〕系米国人。民主党有力政治家。ミッチェル報告〔二〇〇一年〕はイスラエルに入植地拡大政策の中止を求めた）を中東和平工作に派遣したり、イスラエルを牽制^{けんせい}してイランと直接対話する姿勢を示唆^{しき}したりするが、ガザ封鎖や

ガザ攻撃への米国の関与責任には音^{おと}無^なしの構えをとった。そこで、ダヴォスの世界経済フォーラムの席上、イスラエル大統領シモン・ペレスへの反発を強烈に演技して、自国民の喝采^{かつさい}を博したエルドアン首相の国＝トルコが、まずオバマにとって重要な訪問国となる。

トルコとエジプト

就任して半年間のオバマには、これ見よがしの対イスラーム接近の身ぶりが目立つ。政権発足まもなく（○九年四月）、彼は一連のG20 [ロンドン]・NATO [ストラスブル、ケール]・EU [プラハ] 各首脳会議^{サミット}に参加、新政権の外交政策のお披露目^{ひろめ}をしたが、その足でトルコを訪問してアンカラでは議^{メジュリス}会で演説、イスタンブルでは大学生らとの対話集会をもった。さらにサウジアラビア・エジプト訪問（○九年六月）の機会に、カイロ大学で講演。ひろくイスラーム世界に向けて「新しい [関係への] 出発」を告げるメッセージを打ちあげた。

これらをつうじて、オバマは、それまで欧米指導者のだれにもできなかった親近感・敬愛の念・卒直さあふれる語り口で語り、独善的な米国前政権や偽善的な欧州諸国との違いを明確にした。歴史上ヨーロッパに寛容や平等の理念を伝えた先進的イスラーム文明の貢献^{あやま}に注目し、欧米の犯した過^{あやま}ちを反省し、イスラームに対する敵意と偏見にみちた欧米の

固定観念^{いまし}を戒める。そしてイスラーム世界には、ともに相手への先入見を捨てて「壁」ではなく「橋」を築こうと呼びかける。これは、核兵器を実際に使用したことのある唯一の国＝米国の責任として、彼が世界に向かって「核兵器のない世界」を実現する「希望」とそのための現実主義的努力とを語ったプラハ演説と、通じあうものだ。

カイロでは、彼は、米国が〔イスラエルの入植地拡大には反対しつつも〕イスラエルと協力して〔イスラエル・パレスチナ〕二国家方式の解決をめざし（これはアンカラでも強調）、アル＝カーイダやターリバーンの過激主義^{エクストレミズム}（エジプトのムスリム同胞団から生まれたハマスについては言及せず）や〔ホロコーストはなかったとする〕「ホロコースト否認」とは闘^{たたか}うことを、強調した。

失敗する役割

オバマがイスラーム世界に向けたメッセージを発信する場としてトルコとエジプトとを選んだのは、このとき、両国が彼の立場にふさわしい路線に立つ体制の国々だったからだ。//トルコ（イスラエルと深い軍事協力関係にあり、アフガン派兵国、NATO加盟国中第二の規模の陸軍を擁し、インジルリク空軍基地は中東の米軍の補給・作戦両面に不可欠）、そしてエジプト（イスラエルと国交をもち、パレスチナ人に対して工作や調停のチャンネルがあり、米国の重点援助の受益国、欧米主導の「中東和平」の拠点としてイスラエルのパートナー、冷酷なガザ封鎖の実施協力国）。

アンカラやカイロがオバマ演説への興奮に沸くとき、米国上院が可決した年間八十億ドルの対イスラエル援助一括法案は実行に移され、米軍無人機がパキスタン・アフガン国境地帯の村々で無辜の民衆を殺し、空腹をかかえ瓦礫をさまようガザ住民は世界中がガザに目を向けてもなお封鎖が解かれぬ絶望のなかに放置されたままだった。

理想をかかげ現実主義で立ち向かって道を切り拓こうとするオバマの知性と深慮と政治手腕とは、どこまで通用するだろう。イスラエルのネタニヤフ内閣では有力閣僚が公然と「オバマの指図は受けない」と宣言し、EUも米国の将来をつめたく見ている。瀕死の欧米中心主義が企てる「自己破産」の悪あがき策動において、オバマは大事な捨て石にされる可能性があることを、私は大統領選の段階から警告してきた。失敗と挫折を滋養とする「反テロ戦争」それ自体が、世界全体に責任を分担させる泥沼化により、欧米の道義的債務を返済不能として処理する「自己破産」計画である。その伝でいくと、オバマ大統領は失敗する役割を演じなければならないことになる。アフリカ系大統領に委ねてみても問題は解決できないことが証明されれば、「自己破産」は完成するというのだろうか。

テストされる想像力

日本人のガザ感覚

女たちの抗議・抵抗運動を見つめて二十年、イスラエル占領地にかよいつめた記録映像作家古居みずえ（一九四八年生まれ）は、渾身の力をそそいだ映画「ガーダ パレスチナの詩」（二〇〇六年作品）で、〔ガザの難民キャンプに生まれ育ち、婚約・結婚、二児の母と

なって大学で政治学を学ぼうとする〕パレスチナ女性ガーダの〔非日常的〕日常を追って、占領の暴虐にひるまず希望を捨てない「生」を描いた。鮮烈に。そして観る人にガーダをまるで自分の「身内」のごとく感じさせる親しさで。あらたなジェノサイドの惨劇がガザを襲ったとき、ガーダとその家族の安否を他人事ならず気遣った日本人は、少なくともなかったはず。古居とガーダは、ガザを日本社会にかぎりなく近づけていた。

注目された日本

古居の映画には見向きもせずガーダなんぞに縁もユカリもなかった大多数の日本人が、イスラエルのガザ強襲には関心をもった。冷酷さでは、「派遣」〔労働者〕切りとイスラエルの暴行とが二重写しになる。だがなにより、いまや世界の作家である村上春樹（一九四九年生まれ）がイスラエルのエルサレム国際ブックフェアで〔「社会における個人の自由」への作家的貢献を評価する〕「エルサレム賞〔二〇〇九年〕」を受賞することになったからだ（村上春樹「僕はなぜエルサレムに行ったのか」〔『文藝春秋』二〇〇九年四月号〕によれば彼が授章に応じるか打診を受けたのが〇八年十一月二五日〔エルサレム市長選挙の二週間後〕、やがて二十三日間のガザ全面攻撃をへて『ハアレツ』紙が受賞を報じたのが〇九年一月二日〔米大統領就任式の翌日〕、エルサレムでの授賞式は二月一五日〔イスラエル議会選挙の五日後〕）。彼は本当に賞を受けるのか、授賞式で彼はなにを言うのかに、日本ではもちろん、世界中から注目があつまった。

村上にはムラカミのやり方がある。彼はエルサレムに赴き、イスラエルの読者に語りかける道を選んだ。スピーチはまず、受賞拒否を求める逆風のなかでの惑いを明かすことで、イスラエルの国際的孤立を暗示。ついで強大な「壁」と脆い「卵」の隠喩で非武装市民を殺す軍事力行使を批判し、無条件に「卵」のがわに立つと宣言。さらに「壁と卵」を「システム」と〔各個人の〕「魂」との対置で説明し、愛の物語を紡ぐ小説家の仕事や中国大陆の戦場から戻って敵味方の区別なく死者のため祈っていた父の姿の記憶をひき合いにだしながら、かけがいのない〔「卵」的「魂」の〕「われわれ」を〔強固な、しかし作り物の〕「シ

システム」に^{エクスプロイト}利用・搾取させてはならない、というメッセージで結ぶ。

村上は言うべきことを卒直に言い、作家個人の栄誉と独立とを両立させる試練に耐えて、ますます声名をたかめた、とおおくの人が感じた。だが、受賞者選定の審査員たちの任命権者であり賞の授与者でもあるニール・バルカト新エルサレム市長（ハイテク企業経営者で宗教色はゼロ、目先が^キ利き早手回しに政権党を離脱して当選）は、エルサレム東部で思いついた入植地拡大（土地接収・住民追放・団地建設）を断行して東エルサレム放棄を迫る国際的「中東和平」圧力を無意味化せよと主張し、これを推進する強硬派だ。村上の謝辞は、イスラエルの読者以外は、相手を特定しない。臨席するシモン・ペレス大統領／賞を^{さづ}ける市長／〔日本国政府も含め〕世界が承認せず、論争の^{まど}的の〔「統合」〕「エルサレム市」／ブックフェア^{ボード}理事会ゼーヴ・ビルガー議長／これらすべてが無視される。受賞したという状態（ないし空気）を感謝する〔英語表現とはいえ、あえて〕「日本的あまりに日本的」文脈。そして、「西洋^{ウェスタン}の読者を魅了」という選考理由をはぐらかすように、世界中の多くの場所で人々に愛読されている事実が感謝されるのだ。それでも、イスラエル国家の「顔」のひとつであるエルサレム賞「システム」がムラカミをからめとろうとする呪力は解消しない。シモン・ペレスもニール・バルカトも、「卵」の殻のなかだけに／ないし「われわれ」のなかに／^{おき}納まりきらない。

エルサレム問題

ところで、村上春樹は、「〔君はそこで別の誰かになり、べつのなにかになる〕」、「この僕らの住んでいる世界には、いつもとなり合わせに別の世界がある」、「迷宮というものの原理は君自身の内側にある」〔『海辺のカフカ』下、新潮社、二〇〇二年〕、「すべてはよそから来て、またよそに去っていくのだ。僕はぼくという人間のただの通り道にすぎない」〔『ねじまき鳥クロニクル』第2部、新潮社、一九九四年〕というように〕境界を突き抜け自在に往還する作品世界によって、本書がとり扱うテーマとも響きあう作家なのである。

エルサレム賞授賞式での彼のスピーチは、一見、単純明快な二分法と^{エンベシー}感情移入への飛躍とに^よ拠っている。彼が縦横^{じゅうおう}に繰りだす「物語」と親^{した}しんできた読者は、きょうは例外的に^{うそ}嘘

をつかぬ日という彼の冗談^{ジョーク}からも「ヘンにヨソ行き」が気になる違和感を味わいはしなかっただろうか。二項対立の割りきりとおぎなりの踏み込み^{コミットメント}がもっとも相応^{ふさわ}しくない都市、それがエルサレムなのだ。

エルサレムには、アラビア語でムラカミの小説を読むパレスチナ人もいる。彼らは「動物扱い」に抗して〔「動物よけ」の〕〈壁〉の現実とたたかっている。ユダヤ人と自覚するゆえに、パレスチナ人の戦列に立って〔エルサレム＝イスラエルの地の排他的独占のシステムである〕「ユダヤ人国家」と対決する者もいる。歴史的に、また現在も、〔皇帝・国王・大統領・ローマ教皇をはじめ〕あらゆる外部勢力がエルサレムを「わがコト」として干渉・介入してくる。「世界の臍^{へそ}」〔＝ヨーロッパ的観念〕については、まえに触れた。エルサレ

ムの象徴性は、なにより、「ダヴィデのまち」／「イエスの死と復活の場^ば」／「預言者ムハンマドの〈夜の旅〉^{イスラミッラージュ}の地」（一夜マッカからエルサレムに飛び、天国・地獄を歴訪する）／

の重なりあいにある。神の命令でアブラハムが息子イサクを犠牲^{いけにえ}に捧げようとしたモリヤの丘は、遠隔^{アクサー・モスク}の礼拜堂のあるイスラーム聖域^{ハラム・シャリーフ}となった。エルサレムの景観を代表する

黄金色^{こがね}の〈岩のドーム〉^{クッバトッサフラ}が覆^{おお}っている岩塊は、地下冥界への下降と天上への上昇というミッラージュの出発点とされてきた。〔二つの円錐が逆向きに尖端部で接するようにして〕天国と地獄が交接する接点こそエルサレム。〔スペインのカトリック神父でイスラーム学者の〕ミゲル・アスィン・パラシオス（一八七一～一九四四）は、ダンテの『神曲』がイスラーム教徒の

あいだに流布^るしていた〔アラビア語の〕「夜の旅」説話を〔トスカナ地方の言語で〕翻案したものであることを証明した（Miguel Asín Palacios [transl. by Harold Sutherland], *Islam and the Divine Comedy*, Kessinger Publishing, 2007. その初発の仕事は一九一九年の著作〔原題は『神曲におけるムスリムの終末論』〕）。ところが、ダンテはムハンマドを「中傷に

耽^{おけ}り分裂相克^{なれ}の種をまく人」として地獄に落とし、永遠^{せめい}の責苦にあえぐ無残な姿を描写す

る（地獄篇第28歌）。他方、イスラーム神秘家^{スーフィー}たちの伝承では、エルサレムは四十人の義人（死ぬと補充されるので「交替者^{たがひ}たち」と呼ばれ、彼らのおかげで全世界は保^{たも}たれる）

が住む〔地下深く^{くらほ}窪んだ〕「穴」と考えられていた。まさしく、エルサレムは元来「ムラカミ」的世界そのものだったと言えるのだ。

だが、受賞者村上には、イスラエル国家など片隅のクモの巣と朽ちさせていくようなエルサレム〈問題〉の歴史・未来の^{いろど}彩りへの^{まんげきやう}万華鏡的観望が欠けていたのではないか。また、〔受賞後のインタビュー〔前掲『文芸春秋』〕が明示するように〕パレスチナ問題を「シオニズムとイスラム原理主義の対立」＝「原理主義」のぶつかり合いと^{とら}把えて済ます通俗理解に縛られているのも、惜しまれる。村上にして然り。欧米中心主義はここまでシブトイのだ。

「シリアの花嫁」

エルサレム賞が話題となるのと同じ時期、東京でイスラエル映画「シリアの花嫁」（エラン・リクリス監督、二〇〇四年作品）の上映がはじまった。イスラエルがシリアから奪って占領・併合したゴラン高地のドルーズ派住民のなかのアマルとモナという姉妹が主人公の物語。シリアの首都ダマスクスに嫁入りするモナは、国際赤十字職員の助けを借りても軍事境界線をなかなか越えられない。アマルは大学で社会福祉を勉強しようとするが、夫^{おつと}の頑固な反対に直面する。そしてヤキモキする観客が息を呑む大団円。その間、イスラエル統治の法的感覚や弾力性・合理性と対照的に、アラブ社会の因習・男性支配・非能率・確執・腐敗を喜劇的に印象づける巧みな刷り込みがすすみ、自立を求める女性への共感がたかめられる。来日した監督は「境界はメタファー。世界中どこにいても、誰もが〈境界〉に縛られている。国の境界でなくても、伝統や宗教、偏見などの…」と映画の主題を語り、これを受けて「人間を押しつぶす中東紛争という題材を^{さかて}逆手にとり、随所で人間らしさを描く手法に引き込まれる」という批評が与えられる（朝日新聞二〇〇九年一月二四日夕刊11面）。

結局、映画「シリアの花嫁」は、モナやアマルへの共感と引き換えに、「境界」や「境界を越える〈課題〉」の一般化によって、問題の境界線を設定した占領者・併合者の責任を隠すことに成功したようだ。ここで、「壁と卵」の「より深い意味」として、村上春樹がわれわれはみんなそれぞれに〔殺し殺させもするシステムという〕壁に直面している卵だという話に飛び移ったとき、その「一般化」が誘いこんだ迷路に思っている。

ゴラン高地について、そこではドルーズ派住民も〔イスラエル内部のドルーズ派とは異なり〕シリア国民として生きようとしているという情報をもたなくても、また〔イスラエルが占領下のシリア領ゴラン高地においてイスラエルの法律・司法・行政を強制的に施行する決定は、まったく無効であり、国際法上の効果もない、とする〕国連安保理決議四九七（一九八一年一二月）に関する知識をもたなくても、真実（具体性をもった現実）

を偽^{いつわ}る映画の作為性（宣伝）が見抜けないうちは、アマルやモナと連帯することはできないだろう。村上の作中人物のこぼれを借りれば、「想像力のないところに責任は生じない」（『海辺のカフカ』上、二〇〇二年）。ガザ封殺のもとでも「シリアの花嫁」の“ヒューマン・タッチ”を感激して迎える日本社会。村上は、日本のなかで彼に受賞拒否を求める「正論原理主義」の圧力を過大評価したのではないか。それともイスラエルへの直言の責任を軽くするために、わざとそうしたのでろうか。

見捨てる無責任

それにしても、喘^{あえ}ぎの声をあげる欧米中心主義の最終的退路は、いずこに？ 考えられる脱出口として、こんどは平然と〈イスラエルを見かぎって捨てる〉欧米の反ユダヤ主義とそれに洗脳された人々の「無責任」という可能性にまでも、私たちは注意しておかなければならないのである。

べつに欧米が見限らなくても、やがてイスラエル社会は変貌し、新しい〈パレスチナ〉が出現するのは避けられない。それだけに、ネオナチやホロコースト否認（ヨーロッパ流歴史修正主義の一現象）などより、人道・人権や自決（自己決定）の修^{レトリック}辞法をもてあそぶスマートな「無責任」が出番となるかもしれない。そのとき、それは、眼^{がん}前^{ぜん}のナクバの連続からわざと目をそらすためにホロコーストの「記憶」に固^こ執^{しゅう}し、ホロコーストの死者たちの死の意味を貶^{おとし}めていた人々の無責任まで、チャラにしようとする動きとなるのだらう。

（4月号に続く）